月が深紅に染まる時。

蒼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月が深紅に染まる時。

【Ｎコード】
Ｎ８３６２Ｚ

【作者名】
蒼夜

【あらすじ】
世界で最も栄えているとも言える国――【イグニル】。そこには、世界中の魔導を使える“１６歳～１８歳”までの少年少女が集う魔導学園があった。　６月のある日、金髪碧眼の（無自覚美）少年ヨルは『私は天界から来ていて、貴様を護衛しに参上した！』とほざく少女と出会う。　――そして、その少女との出会いが全てを狂わせ、ヨルを戦いへと巻き込んでいく。

（……結構省いたな……）

プロローグ。（前書き）

これが初めての作品になります（キリッ

厨二病全開で結構痛々しい文章になると思います。

しかもずぶのド素人です……そんな私の作品ですが、目を通していただけると有り難いです……。

プロローグ。

終わりの無いような暗闇に赤が滴る。

その暗闇に、一つの人型があった。周りが黒一色にも関わらず、それははっきりと見える。
体格はいかにも少年だが、その容姿は奇妙なものだった――赤黒い生地を使ったその服は教会の神父の修導服の様な作りだがどこか邪悪なものが感じられ、顔に目を覆うかのように包帯が巻かれていて顔を窺う事は出来ない。
暗闇から少年へと鎖が伸びる。まるで闇から生まれ、餌を求めるかのように絡みつく。嫌悪を覚えそうなその動きをもってしても、彼は一切喋らない、抵抗もしない。全て受け入れるかのように彼はそこに居た――――――だが、真っ白だった包帯の左側がじんわりと真っ赤に、まるで泣いているかのように包帯を濡らしていく。そして、包帯が吸えなくなった赤が頬を伝った。

――頬を伝う赤が不規則にうねり、まるで刺青のように頬に刻み込まれる。

彼に触れる直前だった鎖が何かに弾かれたかのように急激に暗闇に溶け、彼に絡みついていた鎖も全て消え失せ――――彼の表情が動き、唯一見えていた口元が全てを嘲笑うかのように三日月形に歪められ

る。

――――何かが壊れる音がした。

世界はそれでも回る。噛みあった歯車は止まらずに回り続け、人々の運命を刻む。
運命から除外されたものは異形へと姿を変え――未来を食らう。

.

【ｅｐ．１－１】　俺とアイツと世界の終わり。

「おいおい、冗談じゃねぇぞ。」

少年の頬に汗が伝う。六月に入ったばかりというのに、ジメジメした鬱陶しい猛暑がここ最近続きっぱなしで、彼も痺れを切らしていた。

彼の名をヨルという。ヨルの特徴を上げれば、金髪碧眼の美少年――無造作に伸ばした金の髪に誰もが羨ましがる美しい顔立ち……本人は無自覚のようだが、道を歩けば十割の女の子が振り向く美貌を持った少年だという事は頭に刻み込んでほしい。――そんな綺麗な顔に傷を付けるかのように眉間に皺を寄せ、彼は嘆いた。

理由は一つ――――頼みの綱のエアコンが壊れたのである。リモコンのボタンをいくら押してもうんともすんともしない。リモコンの電池も換えてみたが、やはり駄目だった。

「……やっべぇな。マジで逝っちまったか……あー、どうしよう。生きていけねぇよ。」

うう……と、唸り声を喉の奥から絞り出しながら、ヨルはソファに寝そべった。

「うー、あー……クソ暑い……太陽マジぶっ壊れろ。爆発しろ。」

本当にぶっ壊れたり爆発などしたら、地球は終わってしまうのは知っていたが、今のヨルにそんな事考える気力は無かった。さっきまで涼しかった部屋も一気に気温が上がり毛穴という毛穴から汗が噴き出る。

さっきまで勉強に勤しんでいたが暑さにやられてやる気が出ない。
テストは明日だというのに。
ヨルの成績はいつも上位にランクインしていた。ヨルは第三位――
通常の生徒からすれば羨ましがられる良い成績なのだがヨルは満足
出来なかった。ここは全寮制の魔導学園であり、魔導と学問を学ぶ
場所――という事は、魔導のテストも有る訳で……ヨルの魔導の
成績はいつも最悪だった。理事長から直々に魔導使用禁止令が出る
ほど、ヨルの魔導は最悪だった。魔力を上手く調節できずに大爆発
を起こしてしまう……属性は炎――炎の魔導を操る生徒はわんさ
かいるのだが、ヨルはいつも最下位――――それを勉強で補ってい
る。
それなりに馬鹿にされるのが嫌だから、こうして勉強した結果上位
にめり込む事が出来た。（ちなみに一位は魔導と学問、両方とも満
点）

「うー……溶けるー。」

ぐったりと項垂れているところに、ピンポーンと軽快な音が鳴った。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーンピンポーン

ピンピンピンピンピンピンピンピンピンピンピンピンポ……

「うっせーーえええ！！！！」

「うぎゃあああああああぁぁぁぁっ！！！！！！」

ヨルのイライラが頂点に達し（ただえさえ暑さでイライラしているのに）ドアを蹴破って、インターホンを連打し続けた来訪者を容赦無く攻撃をした。
そのまま床に倒れた来訪者をドアごと踏みつけると小さく悲鳴があがる。ヨルは分かりきっていた――今、このドアの下敷きになっている人物が誰なのかを。

「おーい、シング。ただえさえ暑いってのにこれ以上苛立たせんな嫌がらせか？　あ゛ぁん？」

そう言って、もう一踏みかますとドアと地面の間から「うぐっ」と声が漏れた。――今、間接的ヨルに踏まれ、名を呼ばれたのはシングという少年である。このシングという少年を一言で表すのなら『オタク』。機械が弄る事と二次元の女の子が大好きでいつも青色の作業着を着て、ウエストポーチを身に付けている。頭にはバンダナを付けたその上にゴーグルを装着し、いかにも『メカニック』な雰囲気。ちなみにシングの自室は三つ隣で中はフィギュアと機械といっぱいだ。そりゃあもう、寝る場所が無いくらいに。

「ヨ、ヨル……暑いなら、エアコン点ければいいじゃんか……。」
搾り出したかのような苦しそうな声――そんな事お構い無しに、ヨルは更にガンガン踏みつけ、
「――――そのエアコンが反抗期迎えて、バイク乗り回してたらガードレール突っ込んで逝っちまったんだよ！　もう、親孝行出来ねぇじゃぇか！！」
「い、意味分からん！　ぐ、ぐふっ……ガッ！　……ちょ、たんま！」
ヨルはシングの必死の訴えにようやく踏みつけるのを止め、シングの上に乗っているドアを退かす――と、そこには鼻血をダラダラ流した惨めな姿で地面に寝そべるシングの姿があった。その姿に思わずドアを戻そうとするとシングが体を起こして「何で戻そうとしてんだよ！」と講義の声をあげる。
「……チッ……。」
「何で俺、舌打ちされなきゃいけねぇんだよ。ちくしょう、何だその目はメッチャ怖いごめんなさい生きていてごめんなさい。」
生命の危機を感じ取ったのか、シングは床に頭を押し付け土下座をし――――その頭をヨルが踏もうとしようとして足を持ち上げたのと同時にシングはこう言った。
「ヨル、もしかして。エアコン直して欲しい……とか？」

頭を上げて超良い笑顔で言うシングを殴りたくなったが、そんな事より「はぁっ！？」と声が出るのが早かった。いきなり何を言い出すんだコイツは。

「……お前、エアコン直せんのか？」

「うん☆」

うぜぇ……が、今はそんな事言っていられない。生命の危機に瀕している今ここでシングを殴ったりしたら今夜がやまだろう。溶けて死ぬ。絶対死ぬ。ヨルは渋々シングに言う。

「……うぅ……頼む。」

「敬語で、な？」

殴っちゃ駄目だ殴っちゃ駄目だ殴っちゃ駄目だ！　落ち着け、今日は下手に出るんだ。じゃ無いとエアコンは今日一日使えない！　殴りたい衝動を必死に押さえ込み、ヨルは唾液を飲み込んだ。

そして――

「シングさん。お願いします。エアコンを直して下さい！」

勢い任せでシングの要望通りに敬語で叫ぶ。

「良く出来ました。」

この時シングのその言葉に物凄い殺意が芽生えたのは、当の本人はまだ知らない。

☆

「……はぁ……シング、お茶で良いよな。」

「おう、ありがとう。――しっかし、こりゃひでぇなぁ……。」

シングの言葉に思わず表情が曇る。

「こんなに悪いのか？」

「ああ、かなりヤバイ。こりゃ時間かかるな……。」

と、言いつつウエストポーチから道具を取り出し作業を始めた。時間がかかるとかなり困る。この灼熱の部屋に何時間も居る破目に遭うと思うと憂鬱な気分になる……。冬は着込めば過ごせるが、夏は太陽が相手となればなす術が無い。次から次へと溢れ出る汗に、苛立ちを覚える。太陽頼むから爆発しろ。して下さい。沈めぇぇぇぇっ！！！

「あー……あちぃ……シングぅ……お前は大丈夫なのか？」

「ああ、俺こう見えて南の方で生まれたから暑さには慣れてる。俺は逆に冬が駄目だ。死ぬ。」

あー、そうすか。と適当に流し、ヨルは床に寝そべる。ひんやりとした床が一時的に熱を下げるが、すぐに温まってしまう。ちょっとずつ移動しながら冷たい場所を探すヨルは少し微笑ましく見える。

「やってらんねぇよ。早く直せや馬鹿シング。ゴルァ。」

「ちょ、待てって。案外早くいけそうかもしれない！」

「うおっ、マジでか！？」

シングが素早くエアコンの中で作業し、蓋を被せ４つ端のボルトをきつく締め、

「よし！　出来た！！」

腕で額に浮かんだ汗を拭い、シングは言った。

「……すげぇ……。」

思わず漏れたヨルのその呟きに、シングは自慢気に胸を張る。ちくしょうぶん殴りてぇ。

「おーし、ヨル君。点けてみたまえ。」

「言われなくても点けるっての……。」

ピーと電子音が鳴り、ひんやりと冷やされた風がヨルを撫ぜて思わずブルリと体が震えた。あー……天国だ。

「！　……ヨ、ヨルが今までに無かったくらい、生き生きしている……だと……？」

眉間の皺が消え、冷たい風を堪能する――が、ヨルは一つ小さくく

しゃみをして両腕を抱くかのようにして震える。どうやら、さっき大量に汗をかいたせいで体が冷えてしまっていたらしい。ヨルは着ているワイシャツのボタンを一つずつ外していき――ワイシャツが肌を滑り、ぱさりと床に落ちる。そんなヨルを見てシングは苦笑いをしつつ、

「おいおい、いくら涼しいからって脱ぐだなんて――――」

「ばーか。汗かいたから着替えんだよ。」

苛着いた口調で言いながら、クローゼットの棚を開けて新しく出したワイシャツを着てボタンを留めていく。ヨルに遮られ、シングは少し不貞腐れる。床に寝そべって頬杖をついて不満気に言葉を洩らした。

「ちょっくら弄ってて分かったけど、ヨルんとこのエアコンめっちゃ最新型じゃんかよ。つい最近出たやつだぜ？　何だよ贔屓（ひいき）だー！」

「んなこたぁ知らねぇよ。」

寮のエアコンは全部学校が支給したものであり、公共物。しかも、成績が良い生徒にはそれなりの物を貰えちゃったりもするが、シングの場合テストの順位が半分以下なので特に何も貰えない。欲しい！　と思ったならば、テストの順位を上げる他、手段は無い。

「明日、テストだろ？　明日頑張って順位上げれば、何か貰えんじゃねぇの？」

「俺、一切勉強してねぇ。」

もはや呆れの領域に達したヨルは溜息さえ出なかった。本当にコイツは何やってんだか……。
俗に言うジト目でシングを見るヨル。それに気が付いたシングはふざけて顔を赤らめ、

「……ヨ、ヨル……そんなに見つめられると……う、うぅ……！」

「おい、コンクリ詰めと亀甲縛りで吊り下げられるのと……どっちが良い？」

「サーセンしたー！！！」

ヨルの冷徹な問いに思わず身を固くし、硬直するシング。そろそろ本気で危ないと思ったのだろう、一秒にも満たない速さで土下座を繰り出す。そりゃあもうめっちゃ速い。オリンピック選手もビックリする位に。それを見たヨルはいつもならちょっとシングに意地悪とかするのだが――今日は何故かそんな気分にはなれなかった。シングに対してだけ言葉より手が出てしまうヨルにとっては珍しい感覚。エアコンのおかげで熱で浮かされていた思考が覚まされたのか、冷静にさっきの自分の行動を思い返せばちょっとやりすぎたと自分でもそう思う。

……うー……。

ヨルは顔を顰めた。すごい嫌そうに顔を歪めながらシングを見る。ずっと頭を床に着けた状態で――何度も言うが土下座の状態でそこに蹲っている。ダンゴ虫のようだ。

「……う、えー、あー……その、シング？　……えーと……。」

すごい強気のヨルには珍しい、おどおどした、絞出したかのような声に思わずシングが顔を上げる。シングの視線がヨルに向けられたが、ヨルはすぐに明後日の方向に視線を変え、必死に逸らす。ヨルの奇妙な行動にシングは「???」といった表情で視線を投げかけてくる。

……言いづらい。非常に言いづらいっ!!! 部屋はとっくに冷えているというのに、冷や汗が頬を伝った。———ヨルはシングに対して礼が言いたいようなのだが、なかなか言葉が見つからなく言葉を濁している……ぶっちゃけ、「エアコン直してくれてありがとう!!」と言ってしまえばこんな茶番は終わるのだが……。

「……シング、聞け!!」

どうやらやっと腹を括ったらしく、ヨルは自分を落ち着かせるかのように大きく息をする。そして、少し視線を逸らし、

「エアコン……ありがとう。直してくれて。」

「ヨル、お前頭打った?」

——努力が全部否定された気がした。いっぱいいっぱい悩んだ挙句、頑張って礼を言ったのに(頑張るほどのものでは無いが)この仕打ちは何だ?

「シーンーグー……?」

「あれ? ガチだったの? ガチでありがとうって言ってくれてたの?」

あとはもう、勢いに任せるだけ。沸々と湧き上がる怒りをそのまま

全てシングへとぶつけるだけ。

「ふざけんなあぁぁぁぁぁああぁぁっ！！！！！」

ヨルの怒りが込められた叫びが寮内を木霊する――――筈だった。更に大きい音で掻き消されたからだ。全てがスローモーションに見えた。シングが何かを驚愕の表情を浮かべていた。それは明らかにヨルに対してではなく、他の何かに向けられている。ヨルは振り返って、思わず息を呑んだ。

――赤黒い光の柱が空に向かって伸びていたからだ。

衝撃波が窓ガラスを叩き割り、ヨル達を襲う。軽々と持ち上がって吹き飛ばされた体は色んな所へと叩きつけられる。ガンッ！！　と頭をどこかにぶつけ、火花が散る。視界が揺れている。無音。――――その無音の中、歌が聞こえた。美しく、どこか懐かしい――――子守唄。

ヨルはそのまま、瞼を閉じ――意識を手放した。

【ｅｐ．１－２】（前書き）

ちょっと痛々しい（怪我の方）表現が出てきます。

気を付けて下さい……。

【ep. 1－2】

激しい頭痛で、ヨルは意識を取り戻した。視界がぼやけまともに前が見えない……。
部屋の中はめちゃくちゃになっていた。ガラスは砕け、カーテンがビリビリに擦り切れている。

「……う、ぅぁ……ぁ……」

唸る様に息をして、酸素を貪る――酷くだるい。……重い体を引きずる様に体を起こし、座り込むと少しは楽になり、ぼやけた視界も焦点が合ってくる。

――目を覚ませばそこは血だらけの世界だった。

いや、実際はそうでは無いのだが、一瞬そう見えて息が詰まる。
赤、赤、赤……空でさえも血を塗りたくったかのように真っ赤に染まっていた。
暫く何が起こったか分からなり、放心状態だったが――ヨルははっとなって辺りを見渡せば、

「シ、シング！！」

クローゼットの前にぐったりと倒れているシングを見てた。
血相を変えて急いで近づくと――――彼の右肩から血が滲んでいるのが視界に入る。
あの時の衝撃波で割れて飛んできたガラスの破片でパックリいってしまっている。ドクドクと溢れる血を前にしてヨルは頭が真っ白になって、愕然とした。

さっきまで色々コロコロと表情を変えていたシングの顔は深い眠りについたかのように安らかなもので、彼の肩から溢れ出る血の鼻を衝く鉄の臭いが更にヨルを追い詰める。

「……い、意味わかんねぇよ……何なんだよ、これ」

空と同じ様な真っ赤な色になってしまった床に着いた両手に力が入る――体が震え、悲しみが湧き上がってくる。全てが真っ赤で、壊れた世界でヨルは嘆く。動かない。返事をしない。笑わない――人形のようなシング。

彼は呟く。

――――ワケガワカラナイト。

『貴様、か？』

凛とした声がヨルの絡んだ思考を全て薙ぎ払った。俯きかけた頭を上げて、ヨルは弾かれたかのように声のした方へ顔を向け――息を呑んだ。

部屋の中に、同年代位の少女が居た。ただし、奇妙な格好の……襟の有る短い純白のワンピース、スカートには動きやすくするように、スリットが入っていてそこから黒いスパッツの様なものが覗く。か、繋がっていない二の腕からの袖は、指先が少し見えるくらいの長さ。そして、全ての裾に青いラインが走っている。神聖なその服装に同調するかのように美しく、腰まである黒髪は一つに束ねられている。少し跳ね上がった一部の髪が少し可愛らしさを滲み出させる――のだが、彼女の今の雰囲気に掻き消されてしまっていて美しさが強調されていて、擦り切れたカーテンが彼女を覆うかのように揺れるその様は息を呑む程だった。

彼女は多分窓から入ってきたのだろう……窓を後ろに俺達を見据え――彼女の目が細められ、眼光が鋭くなり―赤い世界を切り裂くかのような蒼い瞳はヨルのみを映す。

「貴様、名は？」

再び、彼女の凛とした声が静寂に響く。ヨルは震える口元で必死に言葉を紡ぐ。

「……ヨル、だ……あんたは……？」

「私の名か？　私はルナという。」

ルナという少女はそう言って微笑んだ。ヨルは顔を顰め、少し低めの声でルナに問う。

「あんたか？　……やったのは」

ルナは問われた瞬間、豆鉄砲を食らったかのような表情をした後――すぐに真面目な顔に戻り、「いいや、違う」と否定した。ルナ……さん？　は、何かを知っているとヨルはそう感じた――根拠は無い。ただ言えるのは、自分の質問に対して答えられると言う事は見ていたという事……。ヨルはシングの傷口を見つめる。そんなヨルを差置いて、ルナはこう言いだした。

「私は『対悪魔天界軍（たいあくまてんかいぐん）・特攻隊長（とっこうたいたいちょう）』であり、天界からヨル――貴様を護衛しろとの命令が下り、参上した次第――――」

「ちょ、ちょっと待て！！！」

聞き慣れない単語のオンパレードに驚いて、さらに混乱する前に側にあったクッションをルナに投げつけると寸前の所でルナに叩き落される。

「あー、えっと。突っ込むべきところが沢山有り過ぎるからそれはあとで聞く……ところでルナ、さん。……その……治療とか出来るか？」

今、ンな事説明されたら確実に何かがキレる。
無理矢理ルナの言葉を切って、ヨルがシングの傷口を指差した。

「？？？」

ルナがこちらへと足を進めてくる――その度、低めのブーツでガラス踏み砕く音が響いた。
ヨルの隣に方膝だけ着いてシングの首にゆっくりと細い指が触れる。

「死んではいない……しかし、傷が大きいな……」

目を細め、ルナは言う。
ルナは左の袖を漁ると一つ、小さなビンを取り出してこちらに見せ、

「これは天界の薬だ。私達にとってこれは単なる傷薬でしか無いが、人間のこういった怪我はほぼ１０分程で完治する」

「……っ！」

思わず声を洩らし、驚きを隠せないヨルをよそにルナはシングの患部周辺を見るために服を切り裂いた。
怪我は酷いものだった。真っ赤な血が流れ出る傷は大きく肉が裂け

て骨が少し見えてしまっている。
かなり深い。そのグロテスクな光景にヨルは直視出来ずに目を逸らした。

「無理はするな。後ろを向いていればよい」

ルナが後ろを向けと促し、それに従って背を向ける。
ヨルはシングを治療するルナを背に、語りかけた。

「なあ、こりゃあいったいどうなってんだ？　赤赤赤……全部真っ赤じゃねぇか」

少しの笑いを含んだ声でヨルは問う。もう、何が何だか分からないとヨルは混乱しているようで頭を抱えた。ルナは薬を指で掬い、ぱっくりと切り裂けた傷口に塗りこみながら、

「魔界の者が貴様を見つけ出すために結界を張った」

そう言って、血と薬が混ざり、糸を引く指を布で拭う。

「……そう、か」

「……冷静だな。普通の人間なら発狂してもおかしくは無いのだが」

「……冷静なんかじゃねぇよ。冷静じゃ……」

本当はどうにかなってしまいそうだった。狂ってしまいそうだった。
でも、今脳内を流れているあの子守唄……それが許してくれないのだ。いっそ狂ってしまった方がどれだけ楽か。ヨルから溜息が漏れた。

「――ていうか、さっきから、魔界とか天界とか言ってっけど、何がいったいどうして、俺を探してんだ？　あんたはいったい何者なんだ？」

ヨルはふと思ったことをそのまま声に出す。後片付けの最中のルナは容赦無く告げる。

「魔界が貴様を探している理由？　――――まあ、単刀直入に言えば、貴様を消すためだ」

「！！　何で俺なんだよ！」

弾かれたように振り向けばシングの治療は終わっていた。傷口に布が被せられているが血が滲んでいない。薬の効果がもう効き始めているのだろう。――ルナはヨルに背を向けながら言う。

「――第二次神魔戦争（だいにじしんませんそう）。それの中心となってしまった、という事だ。魔界に住む悪魔共が張るこの結界内ではある特定の人間のみが活動できる特別な空間を作り出す。そして――その活動できる人間……それが世界の核【ゼロ】――それが、ヨル……貴様だ。【ゼロ】は、簡単に言えばこの世界の軸――全てを受け入れ、支え、始まりと終わりを司る者を指す。全ての均衡を保つものとして、複数表れる事は無い」

言葉を失うヨルに語りかけるように、ルナは続ける。

「もう、数千年も昔の事だ。元々、天界と魔界は仲が悪かった。――――だが、人間界で神の使い……まあ、分かりやすく言えば『巫女』だ。その巫女と悪魔との間に子が出来てしまったのが、第一次神魔（だいいちじしんま

戦争(せんそう)が始まったきっかけだ。悲恋が起こしたこの戦争――――事の発端の巫女も悪魔ももう居ない」

ルナは小さく息を吐いて続ける。

「そして、数百年程前――人間までもを巻き込んだ第二次神魔戦争(だいにじしんませんそう)が始まった。魔界が人間を襲ったのが始まりだった。魔界は【ゼロ】を探し、消す――世界の核が居なくなった世界はバランスが取れなくなり、消滅する――のだが、そこを狙って魔界が吸収していった。そうして魔界は徐々に強くなっていった。もう天界は限界を迎え始めて、最終的に導いた答えがこれだ。消される前に、襲われる前に、保護をする。これ以上、好き勝手にやらせないように」

更に彼女は告げた。

「私の使命は貴様を守る事だ。――――故に、貴様は私の主(あるじ)であり大切な存在でもある。さあ、世界に選ばれし我が主(あるじ)よ！　貴様は何を望む？」

運命の選択――何を望むかは己次第……今、己が欲するもの……。ヨルは息を呑んだ。今、俺が欲しているもの――白濁する頭で必死に探す。

赤い、赤い世界――そして、結果的に世界の核……【ゼロ】のヨルに巻き込まれて傷ついたシング、もう戻らないかも知れない日常……今になってみれば、普通こそが奇跡だったのかも知れない。だから、ヨルは酷く欲した――その奇跡を。

その言葉に「……俺は……」と唸る様に、しかしはっきりと告げる。

「俺はッ……普通に……普通に暮らしたい！」

心の底から思った事をそのままぶつけた。こんな周りが傷つく様な運命に翻弄されず、いつも通りに暮らしたいと願った。望んだ。日常を欲した。体が震える――全てを曝け出し、叫んだ事なんて今までにあったか？　声がこれ以上出ない。色んな感情が混ざり、全てを濁す。

「――――御意」

ルナはそう言って、微笑んでみせた――――刹那。

――――ズガアアァァァァン！！！！！

窓の外で破壊音が空気を揺らし、響く。

「来たか。ヨル、隠れろ！」

ルナがパンッ！　と両手を合わせると手と手の隙間から純白の光が溢れた。

彼女が立つ床には複雑に線が交じり合った魔法陣が描かれ、魔力の渦が服と髪を大きく揺らす。

ルナはゆっくりと合わされた両手を離していくと、そこに向かって魔力の渦が集まり始め、棒状に形を成していく。

そして――右手で棒状の純白を強く掴むとそのまま右に引いて纏わり付いていた魔力を振り払った。

それはあっという間の事だった。魔法陣は消え、魔力の渦は収まり再び静寂を取り戻す――が、ルナの右手に握られているのは刀――名は『白夜』。

不可解な文字が刻まれ、未知なるオーラを放つその刀は穢れを知ら

ないような純白……。

ルナが白夜を後ろに構える。
ルナ窓の外をじっと見つめ――何かが彼方でキラリと輝き、紫の光で出来た無数の槍がこちらに向かって来た。

そして――――無数の光の槍がルナに襲い掛かる。

金属同士が擦れる甲高い音を立てながら槍と刀がぶつかり合い、槍を受け流すかのように上手く軌道を変え、ヨルの方へ飛んでいかないよう全て叩き落す。
槍はルナの周りを囲む形で床に刺さっていって、一本もヨルの方へ飛んでいく事は無かった。
また静寂を取り戻していく。
ゆっくりと地平線の彼方から、結界が崩れていきオレンジの輝きが見えた――夕焼けだ。
眩い輝きが赤を掻き消すかのように差込み、窓際に立っていたルナはその眩しさに思わず目を細めた。
結界が徐々に崩れていく。

ルナは呟き、刀を右下へを振り下ろすと――先端から形が崩れ、粒子となって消えた。

「逃げたようだ」

ルナが溜息混じりにそう言う。声色には先程までの緊張感は無く、柔らかいもので異様に安心できた。
ルナは振り返り笑顔でヨルへ語りかける。

「もう安心してよいぞ♪　暫くは攻めては来ないだろう……だぶん」

笑顔だった。そりゃ、凄まじいほど良い笑顔で無責任な事を言い出すルナに、ヨルは先程までのギャップに硬直した。

「全く……結界張るだけ張っておいて、逃げるとは。随分と臆病だな」

攻めるなら、攻めて来い！　と不満を洩らすルナに、どこからそんな自身が湧いて来るんだ、とヨルは引き攣った不安を含む笑みをこぼした。そんなこんなしている内に、結界の崩れが寮のところまでやってきた。徐々に赤から、元の色を戻してくのと同時に壊れた場所が元通りになっていく。
ここでもルナは顔を顰め、

「律儀なものだな。命を狙っているのにも関わらず、建物を直していくとはッ！」

ルナは意外、といった表情で言うがぶっちゃけ直ってくれて嬉いっす。
そんな漫才のような事をやっている間に、シングの指先がピクリと動き、

「……ん、うあ？　ヨル？」

「シング！？」

良かった、と一安心するヨルはどこか優しい表情をしていた。
シングが体を起こすと、あーとおっさんの様な声を上げながら頭を押さえる。

「あったまいったーい……俺、いつの間に寝てたんだ？」

ヨルはピクッと震えた。
シングのその言葉にヨルはルナに問おうと後ろを向いた――が、そこには誰も居なかった。シングは不思議そうにヨルを見て、

「んー？　どうした？　俺が寝てた間、何かあったのか。てか何で服破れてんの？」

？？？？？と混乱するシングは、頭を掻いた。あんなに大きかった傷はすっかり消え、痕すら残っていない。ヨルに問うシングに自分が体験したことなんか言えるわけが無い。むしろ馬鹿にされるだろう。しかし――都合良くシングは記憶が飛んでいるようで……。

「俺は、ヨルのエアコン治してそんで……」

「足滑って頭ぶつけて気絶してた」

――――全て、無かった事にした。

シングは笑って「ワリーな」と謝ってくる。それを素っ気無く返す。

「別に。勝手に落ちたからほっといただけだから」

「ひでぇ！！　せっかくエアコン直してやったのに。何この仕打ち」

「おら、テメェはもう用済みだ帰れ。いつまでも居座ってんじゃねぇよ」

「……泣いて良い？」

聞く前から涙垂れ流しっぱなしのシングはふらつく足取りで玄関へと向かっていく。

（あれ？　ドアいつ直ったんだ？　ま、いっか）

不意に気付いた違和感だが、特に気にしないでドアノブに触れる。シングがドアノブに手をかけたとき、不意にヨルに名前を呼ばれた。ヨルはソファに座っていてこちらからは横顔が窺える。ヨルの口がゆっくりと動き、シングに言った。

「エアコン、直してくれてありがとな。助かった」

ヨルは確かにそう言って、ちょっと照れくさそうにこちらを睨んだ。

【ｅｐ．１－２】（後書き）

お目汚し失礼しました……。

はい。趣味です。

ヨルのツンデレと不器用さが書けないもどかしさにどうにかなりそうです……

ヨル君はシングを酷い扱いするけれど、やっぱり大切な友達なんです。

ヨルの最後のデレでそれを感じ取っていただけたら嬉しいなと思います。

感じ取れない場合は私の文章能力不足です。どうぞ嘲笑って下さい……嘲笑うが良いさ！！

そんで、ルナがヨルに何を望む？と聞くシーンがありますよね……ヨルは今まで通り普通に暮らしたい――【日常】を望みました。

貴方なら何を望みますか？ｗｗｗｗ私は金ですｗｗｗ（オイ

【ep. 1－3】

ルナはあれっきり、戻っては来なかった。
戻ってくるとは限らないと分かっていたのだが、もう少し詳しく話してほしかった――――現状が掴めないヨルに不安と『死』という恐怖が募り始める……今まで極普通の生活をしてきた自分が戦争のど真ん中に立っていると思うと鳥肌が立つ。
傍観者だったはずだ。
どこで崩れたのか分からない己の運命（さだめ）――頭が痛くなった。
あのような出来事があったせいか、食事も喉を通らず、まともに睡眠する事なんか出来きるワケも無くヨルは最悪な朝を迎える事となってしまった。
眼球に張り付く眠気を払うかのように数回瞬きをすると、「くぁ……」と欠伸が出た。体が重い。
今日はテスト当日だというのに全く勉強なんて手を付ける事なんか出来なかった……と、言うより無理だった。

「うー、だりぃ……」

ヨルは隙間から光を零すカーテンを勢い良く開けると予想以上に眩しい日差しに思わず目を細める――段々と慣れていき、ヨルは窓の外を眺めた。
一瞬、昨日の光景が脳裏を過ぎったが、窓の外で楽しそうに飛ぶ小鳥達を見て現実に引き戻される。
――今日も何事も無かったかのように世界が回る。ヨルの心に芽生えた不安さえ置き去りにして、世界は回り続けていく。
ヨルはゆっくりと部屋の中を見渡す――――　またあの光景が見え

たが、また元に戻っていく。
顔を顰め、開けたカーテンを再び閉める。昨日の光景がトラウマとなって頭から離れないのだ。
そんな状態の自分に告げられたルナの言葉は未だ心に刻まれている。
『私の使命は貴様を守る事だ。――――故に、貴様は私の主（あるじ）であり大切な存在でもある。さあ、世界に選ばれし我が主（あるじ）よ！　貴様は何を望む？』

己が叩きつけるように、全てを曝け出すかのように望み、欲したこの日々――本当に戻って来るのだろうか……。
ぼーっと外を眺めていると鞄を持った同い年位の男子数人が道を歩いているのが見えた。彼の歩いている道は整備されている公共道路で――校舎へと一直線へと向かう道でもあった。
ああ、そうか……今日は学校だったんだと憂鬱な溜息をつき、部屋の中へと引き返す。
時刻は７時５３分……ヨルは学校に行くために用意を始めた。

☆

時刻は８時２４分―あと６分でホームルームが始まる。
１－Ｂの教室はシングが居るクラス……シングはヨルの席である窓際の一番後ろの席を見据え――溜息を一つ。どうしたものかとシングは時計を確認し手元にあった機械の一部を弄る。
同級生からゲーム機の修理を頼まれたのだ――と言っても、３分ほどで直るくらいの軽い故障で、あとはもう蓋を取り付けるだけなのだが。
机は弧を描くかのような形で作られていて、一人で勉強するには十

分な幅で区切られている――それが5段ほど有り、1クラス約50人……それが5クラスある。
高等部全員で753名――この大きな敷地には少ないぐらいとも言える人数だが、中等部も含めれば軽く千を超える。それでもまだ少ない方だ。ここは全寮制で色々な国から来た生徒もいる……シングもその1人だった。
シングの故郷はここから少し離れた機械都市と呼ばれている【ハルゲン】という小さな都市――……。
（あー、久々にジョンに癒されたい～……）
シングは愛犬のジョンを思い浮かべ、螺子を締めようと取り出したドライバーで思いっきり指を突き刺した。

「いいいいいいいいいいいッ！！！！！！！」

涙目になりながら、突き刺した指を必死に押さえて悲鳴を噛み殺し、痛みに耐えるが――声が小さく洩れてしまう。
そこに、何も知らないヨルがやって来る。
無造作に伸ばした金髪と碧の瞳――成績優秀で性格はちょっと癖があるがその癖（ツンデレ）が良いと評判の彼がシングに教室に入って一番最初に声をかけたのはシングだった。

「何やってんだよお前……」

開口一番がそれだった。何かに目覚めそうになりながらも必死に理性を繋ぎ止め、震える声で言う。

「い、愛しの……ジョン、思い……出してたらっ、ドライバーで、ゆ、指刺しちった……」

シングのその言葉を聞いて、ヨルは顔を顰めた。

「……ジョン？　愛しの……ジョン？？？　……」

ヨルの脳内でシングがジョン（何故か筋肉が凄い人）という男と抱き合っているのを想像して、悪寒が駆け抜けた。

「お、おい……何で俺をそんな目で見る？　ちょ……ジョンって俺の愛犬！　犬！！」

「！　い、犬……だ、と！？」

再びヨルの勘違いワールドが展開され、シングがジョン（何故か筋肉が凄い人）を犬の様に扱う、女王様のようなさまを想像して、シングを思わず二度見してしまった。

「……シング、お前……まさかっ……」

「誤解だ！！　今お前が何を想像したのか良くわかんねぇが、それは確実に違う！　俺はそう断言できる自信がある！！！」

シング……と、ヨルは珍しく悲しげに呟きながら市販のレモン汁を取り出し、

「……俺、相談、乗ってやろうか？」

「うん、ありがとう。……そのレモン汁はどうする気なのかな？
ヨル」

本能的に傷口を隠すシング。それを見たヨルは「……ちっ……」とどこか残念そうに舌打ちをかまし、レモン汁をポケットにしまう。

最近更にSに磨きがかかってくるヨルに少し戦慄を覚える。

キーンコーンカーンコーン……と、チャイムが鳴った。もう6分経ってしまったのだ。

「んじゃ、あとで」ヨルは素っ気無くそう言って、自分の席に戻っていった。

ガラガラと教卓側のスライド式のドアが開き、白衣を羽織って眼鏡を掛けているいかにも理科担当の先生！　と思わせるような服装をした感じの教師が入ってきた――このクラスの担任、アロッド。

「んじゃー、ホームルーム……めんどくせぇけど今回はまともにやらなくちゃなんねぇ……」

教師とは思えない発言はもうみんな慣れていてたいして気にしてはいなかったが、珍しく真面目な発言に少し教室がざわめく。

「んだよお前ら……まあ、良い。今日はとっっってぇも良い知らせがある」

アロッドのその言葉に、更にざわめきが大きくなるとアロッドが静まれ静まれとジェスチャーで示せば、ざわめきが止んだ。

「ぬぁーんと、編入生がこのクラスにやって来た。――――じゃあ、入って来い！」

再びざわつく教室に、カツン……と足音が響いた。

歩くたびに揺れる美しい黒髪、真っ白な肌は髪の色のせいでかなり映える。そして、美しい蒼の瞳――右側のちょんと円を描いた癖の

ある髪が揺れる。
ヨルは目を疑った――昨日現れた少女に瓜二つの少女が編入生として同じクラスにやって来たのだ。

「んじゃ、自己紹介」

「ルナという。以後、よろしく頼む」

本人だった。マジで本人でした。
ルナが何気無く、笑顔を振り撒いた瞬間、『ウオォォォォォォォォォォッ！！！！！！！！！！』男子から歓声のが上がり、耳を劈く様なその歓声は教室を揺らした。
男子の欲望が渦巻くその雄叫びに溜息をつく――アロッドが魔力を教室中に軽く流すとそれは起きる。

キィィィィィィィィィィィィィッ！！！！！！ という黒板を引っ掻いた様な音が教室中に響き渡った。思わず耳を塞ぎたくなるその音に、歓声も止み、みんな自分の耳を塞いでいた。
アロッドは歓声を利用して、とある現象を生み出したのである。魔力を充満させ、大きな音と共に魔力を縮小させることによって、先程の様な甲高い黒板を引っ掻いたかの様な音が生まれる――――しかし、それは大きい音がある場所ではないと起こらないという条件がある。

静まり返る教室――……みなぐったりと机に伏せていて元気が無い。
そんな教室にアロッドのマイペースな声が響く。
「おい、ヨル。お前ルナちゃんと幼馴染なんだってなァ。ちょっく

ら今日、校舎内案内してやってくれねぇか？」

「……はぁ？」

誰が幼馴染だって言ったよ？　……ルナさん……いいや、ルナ！　テメェか！！　勝手な事すんなと睨み付けるが、ルナはずっと笑顔のまま――しかも、男子から送られてくる視線が痛い。ルナはそんな事お構い無しに「ヨル、頼むぞ！」なんてほざきやがった。ちくしょう……何で編入なんかしてきたんだよ……。

――全ての始まりの歯車が、他の歯車と噛み合い――動きだす。

ニコニコと超良い笑顔のルナに対して、ただ引き攣った笑みを浮かべる事しか出来なかった。

【ｅｐ．１－３】（後書き）

はい。第一話が終了いたしました……イミワカラン……何だこの糞文はｗｗｗｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8362z/

月が深紅に染まる時。

2011年12月28日00時49分発行